

令和6年度第2回市民活動センター評価委員会 摘録

日 時：令和6年8月6日（火）午後1時30分～午後4時30分

場 所：京都市役所分庁舎会議室

出席者：

（委員、敬称略）東郷 寛（近畿大学経営学部准教授）＜委員長＞
城戸 英樹（立命館大学政策科学部教授）＜副委員長＞
杉原 恵（一般社団法人 my t u r n代表理事）
鈴木 ちよ（市民公募委員）
梶井 大治（公認会計士）
森本 純代（一般財団法人藤野家住宅保存会理事）

（事務局）京都市文化市民局地域自治推進室

地域コミュニティ活性化

・北部山間振興部長 平井 淳史

市民活動支援課長 小林 寛

市民活動支援係長 別所 隆男

担当 高山 玲子、板東 瑞帆

傍聴者：1名

取材者：なし

議 事：令和5年度 いきいき市民活動センター事業の報告

開催概要

1 開 会

2 議 事

7つのいきいき市民活動センター（以下「いきセン」という。）指定管理者が令和5年度に実施した事業についてプレゼンテーションを行い、事前に提出された事業報告書も踏まえ、委員から質疑を行った。

<北いきいき市民活動センター>

（東郷委員長）

多種多様な事業活動をされている。イベント、人権学習など幅広い。高齢者、障がい者、不登校の方の支援ということで、地域福祉ボランティア養成などと今後つながっていくと思うが、来年以降、具体的に事業をどのように組み立てていくのか。

（北いきセン）

佛光大学の学生が、ふれあい共生館で学習会の取組などを行っている。そうした取組をしてく中で、かつて小学校の先生をしていた人などに学生の指導をお願いしたりしている。大学生の取組、地域の団体との取組（タグラグビー）をいきセンとして支援しながら自走を目指しながら

らゆっくりと手を放していく。

(東郷委員長)

佛教大学は特に社会福祉が有名なので、教員のリソースを生かしながら組織化していくと、より良い活動が展開できるのではと期待する。

(森本委員)

地域の中に出て行ってということで交流が広がっている。老若男女一体になっていきセンの事業に参加し、一緒に活動していく姿勢が、昨年にも増して良くなっているという印象である。

船岡山西ストリートの件も、いきセン主導で昨年プラットフォームの場を作って意見を出してもらったところが結実しており、本当に良かったと思っている。

こんな風に、地域の人たちと知り合って、いきセンが何をしているところかが知られていくことで、船岡山西ストリートと類似の案件が今後出てきたときに、いきセンに相談してみようという土壌につながっていくと思う。

大変だと思うが、こういう取組を続けてほしい。多文化共生というと、外国籍の方の日本で暮らすイメージだが、多様な立場の人が一緒になってやっていくということを今後も続けていかれるといいと思う。

問題提起として、放課後地域福祉ボランティア養成で取り上げているような、実は地域の活動の中でこういう問題があるということを提起していくことは、こういう場でキャッチされているからこそできるものである。実は、あるようでないところ、すくいきれないところがこういう形で発信されていくのが良いと思っている。

(北いきセン)

いきセンとして色々な形でつなぐ役割は今後もしっかりと果していきたいと思っている。

(鈴木委員)

ふれあい共生館に移動してから入館している団体同士の連携や、地域の幼児から高齢者まで幅広い世代との連携、HAPSのアーティストとの連携などもあって素晴らしいと思う。

「地域の歴史・文化活動ボランティアの養成と歴史研究発表・公園等イベント活動」について、地域のお年寄りが高齢化しているので、こういったことが急務だといったお話もいただいた。今後、資料収集・分析もできる人材の確保を急ぐということであったが、学生も含めて方針、目途はたっているのか。

(北いきセン)

ツラッティの方で大学生・院生との繋がりががある。今回、そういう人たちを巻き込みながら進めている。

(鈴木委員)

戦争経験者が少なくなる前に生の声を残していくことの重要性を日々聞いている。特に北いきセンは、人権にまつわる場所も含めての独特の立ち位置がある。意識の高い学生、専門性の高い方々が集まっていると聞いて安心した。その成果についても期待する。

(北いきセン)

特に進めている取組として、被差別部落の歴史については学識研究者が取り組んでいるが、一方で、被差別部落の文化、例えば食べ物であったり、結婚式や葬式など民俗学的なアプロー

チはない。そういうことを今大学院生が研究しており、89歳の方2人から聞き取りをして、取り組んでいる。

<岡崎いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

レコード鑑賞等の音楽関係のイベントや「まちあるきマップ」の作成など、交流人口の拡大を意識したイベントを活発に行っている。他方で、このあたりに住んでいる住民がこういう活動にどれくらい参加しているのか、そうした方々が持っている生活の悩みをくみ取った活動があまりみられないが、どのように考えているか。

(岡崎いきセン)

センター周辺の市営住宅の住民については、現状、そんなには住まれていないのではと思っている。地域の社会福祉のふれあいサロンの方など当センターを使っているが、声をかけてもほとんど参加がない。市営住宅におられて当センターに声がかかるのは40代の方で子供がおられる方などだが、働いていてこちらの取組に参加する感じではない。現状、岡崎学区という意味ではわいわい文化祭などの事業をしているが、ここの市営住宅という意味でいうと町内会も抜けられている。積極的な関りは持っていない。

(東郷委員長)

団地以外の自治会などのとのつながりは？

(岡崎いきセン)

自治会には当センターも入らせてもらって、わいわい文化祭や(令和6年度にはなるが)ドラムサークルも学区の方のイベントに出させてもらったりしている。濃いつながりをもって参加させていただいている。

(森本委員)

まちづくりマップについて、留学生の寮で留学生が参加していると思うが、これは留学生や寮母から地元で親しめるような機会づくりのような相談があつてこういうことをしているのか。

(岡崎いきセン)

当センターがまちあるき事業をしたいと考えていて、左京区役所のまちづくりの地図事業の関係でお声がけいただいて、留学生寮と一緒にまちあるき事業をすることを考えたときに、留学生が取っ付きやすい内容は何かと寮母や団体と一緒にアイデアを出し合ったときに、パンならどの国の言葉でもしゃべれるのではということでパンマップに決まった。結果として大盛況となった。京都はパン好きの方が多く、他の区でもやってほしいなど人気の企画になった。留学生の方は自国のパンの話であつたり、情報交換ができた。

(森本委員)

区役所から声がかかったのか。

(岡崎いきセン)

地図づくりがしたいということで、あちこちに声を掛けていた。

(森本委員)

アピールするのは大事ですね。パンのマップについては、対象者がなじめるもので異国の地

で地域の中に出て親しめるものを探すというのはユニークな企画だと思った。

(岡崎いきセン)

寮に置いてもらって、次の留学生にも作ってもらえたらいいなと思う。

(杉原委員)

自主事業から自走化までということで素晴らしいと思った。課題として継続利用につながらないということがあげられているが、独自でアンケートを取る際などで理由は把握しているか。

(岡崎いきセン)

やめられるときはそっと辞められるので、分からない。

(杉原委員)

利用料金のことがネックになっていることもあるのか。

(岡崎いきセン)

言わずにそのままフェードアウトしていくが多かった。あとは、卓球サークルなどはお年寄りで身体がついていかなくなったというケースもあった。

(杉原委員)

使われている間にコミュニケーションを取って、離れていく方のお悩みなどを事前にキャッチできることがあれば、継続利用が続いて増えていくのではと感じた。

(東郷委員長)

貸館については、利用料金が上がったことも当然大きいと思うが、ポイント制などのアイデアはお持ちか。割引など。

(岡崎いきセン)

割引は考えていないが、新規登録は今年度にも増えているので、去年よりも4月～7月は状況が良いので改善されるのではと期待している。レコードを聴く会の事業をやっているが、企画者が自ら部屋を取って、レコードを聴く会につなげていくということをセンターでアドバイスするなどしており、レコードを聴く会の参加者が、センターで演奏をすることができるということを知っていただいて、広がりを見せていくということがあると思う。

<左京東部いきいき市民活動センター>

(東郷委員長)

厳しい状況の中で精いっぱい頑張っておられると感じている。気が早いかもしれないが、(施設としては)令和7年度末で終了する。劇研(指定管理者)が持つ今までのノウハウを他のセンターの運営にいかしたいという意欲はあるか。

(左京東部)

ある。まだノウハウをいかせる余地はあるのではと思うし、ノウハウを持ったスタッフもいることから、ここできよならとはいきづらいと思う。

(東郷委員長)

スタッフの平均勤続年数は。

(左京東部)

5～10年の間になる。事業にもかかわっているので、引き続きノウハウをいかすことができると思っている。

(東郷委員長)

市民活動を支援するという点に関してノウハウをお持ちなので、ぜひそれをいかしていただきたい。

(鈴木委員)

困難な状況のある中で文化芸術の演劇の強みを生かされていて、様々な事業を継続しており素晴らしいと思っている。いきセンの利用について、コロナ特需がなくなった後、大学生の利用が一気になくなっている。利用者でコアな方々がお亡くなりになったり、施設に入ったりと、どのいきセンでも共通かもしれないが、年齢的な中間層に向けての利用促進の取組が課題になってくるのではと思う。文化ボランティア育成事業は志が高く、素晴らしいことを打ち上げたと思う。前は公募で難しかったため、今回は良い取組を既に行っている団体からの紹介によることとし、結果、登録者が昨年より増えている。

「シャカカツの人」もポテンシャルのある市民の方をコアとしてそこから広げていくという話もあったし、文化祭をやってみたら、センターの存在や団体の取組を知らなかった方が気軽に足を向けてみたら、意外と楽しかったとか、ここにこんなものがあったということで好評なアンケート結果になっていると思う。高齢者と大学生の間の中間層の取り込みにおいても既に社会活動をされている働き盛りの方については、ある程度仕事や家事の制約があっても社会活動、市民活動に少しでも関わりたいというモチベーションのある方が結構いると思う。そのあたりのマッチングをしていくことで、貸館の利用減については、そのあたりがヒントになるのではと思う。全センター共通の課題ではあるが、年齢的な中間層の取り込みを考えていくのが必要かと思う。センター長としてどのようにお考えか。

(左京東部)

新たな利用者の獲得と、アクティブな方の取り込み。正直難しく、事業との連動を考えている。事業に参加いただいた方とのつながりができていくので、そうした人の紹介、例えば、交換会に来ている方は子育て世代で、子どもを連れてきている方もおり、わりと多様で、外国籍の方もいたりする。外国籍の方に今年の聞き取りのテーマである「多文化共生」について、聞き取りをすると実際につながりができてくる。外国籍の人であれば、外国籍コミュニティというのがあり、割とそのような団体の利用に繋がっている（インドネシア、フィリピン、バングラデシュ、インドなど）。今までにない視点だがそういうところで広がっていけばいいと思う。

(鈴木委員)

具体的な事業との連動がキーになってくると思う。左京東部さんは、学生のヒアリングによって冊子や展示などの成果物に仕上げていくというノウハウをお持ちなので、そこと新たな利用者や団体との連携に繋げ、好循環が生まれ出せたらかなり変わってくるのではと思う。期待して見ていきたい。

(森本委員)

劇研は、今までに一度参加させていただいたことがあるが、アイスブレイクのスキルなどの、立場、年齢を超えてスムーズにコミュニケーショントレーニングスキルを持っておられるからかすごく強い。左京東部、西部いきセンのスタッフもそういうスキルをもっていると思う。仕事なり、その人の地域活動なり、PTAなり様々なところで求められるスキルだと思う。こう

したスキルは、それぞれの地域活動やボランティア活動でも効果を発揮するものだと考える。具体的なアイデアはまだないが、コミュニケーショントレーニング的なものを生かすとか、体験することの楽しさとかが生かされていくと良いと思う。

(左京東部)

ぜひいかしていきたいと思う。

<左京西部いきいき市民活動総合センター>

(東郷委員長)

より多くの住民が参加できるようイベントに工夫が施されている。外国籍の方が多く入ってきていることもあり、そのような方々とより深いつながりができるような仕組みを意識した防災イベントを行っているとのことだが、インドネシアの方が多とのこと。インドネシア語を学びたい日本人も多いと思うので、語学を学びたい学生さんを入れていくと、より一層深いつながりができるのではないかと。近隣に住む学生さんに声をかけてはどうか。

(左京西部いきセン)

インドネシアの方の利用が特別多いわけではないが、利用団体の中に外国語学習で多くの言語を教えているところがあるので、それらの宣伝、周知などは積極的にしているが、学生にも直接声掛けもやってみようと思う。

(東郷委員長)

学生にも良い機会になると思うので、ぜひ考えていただきたい。

(鈴木委員)

外国籍の方から小学生から高齢者まで多世代の交流の場というのを、お金をかけるだけではなく、アイデアベースでそれぞれの得意なことを出し合いながら、少しずつ皆で作っていくという姿勢が全ての事業で共通しており素晴らしい。特に「高齢者食事会」を「ふれあい食事会」に変えたことで、高齢者がサービスを施される側ではなくて、自分も手伝う意識になったということは、非常に示唆的ですし素晴らしい。可能性を感じる事例だと思った。高齢者の方も施されるだけではなくて自身が培ってきたものを地域の多世代に向けて共有したい、還元したいという思いがあり、丁寧にお付き合いしてきたからこそ、汲み取れ良い形に定着できているのではないかと。他にはフリーガーデンの試みも面白くてよい。園芸など団地に住んでいるとなかなかできないことが、気軽にできる場所をいきセンが提供しており、また生ゴミをコンポスト化するなど、まさにSDGsで循環していくという話である。また、植物を育てるということは、どの世代にとっても良いことで、育てたものが食事会に使われるという循環もあるということですし素晴らしい取組である。防災に関してアイデアを温めておられるということであったが、酷暑など地球環境が大きく変動しており、前例にないような様々な災害が各地で起こっている。このような中で防災に関してイベントベースで普段から備えるというのは地域活動、市民活動として大事かと思う。外国籍の方も上手に取り込んでの防災イベントなどを考えておられるのかなと思った。現時点のアイデアがあれば聞かせてほしい。

(左京西部いきセン)

地域にデルタフェスティバル実行委員会が主催している「みらいのまちづくり委員会」とい

うのがある。養正地区には自治会がないので住民の意見を集約できる仕組みがないということで、また、様々な団体はあり、団体同士の関係もあるが、お祭りの委員会であれば参加できるという話があり、今年の1月に開催したものについては能登の地震を受けて、防災についてテーマに取り上げてはどうかという話があったものである。地域の防災を担う方や防災士なども呼んでシンポジウムをしたら、避難訓練などをしても若い人たちが参加してくれないという課題が分かった。

理由の一つは堅いということがあった。普段は高齢者が多いので単独で逃げるのが難しい。そういうときに若い人や外国人の人たちもどこに逃げればよいか分からないので、集まりをして、お互い知り合いになり、災害時にどのように動けばよいかといった最低限のことが話せるといいなと思った。

そのために、段ボールピザ窯やかまどベンチがあって、左京区にはないらしいし、設置されたとしても使い方が分からないということで、自分たちで仮のかまどベンチを設置してバーベキュー大会をしてはどうかと思うアイデアが出た。

バーベキュー大会であれば学生の方や外国人の方でも参加しやすいのではないかと。防災士の方から食事と絡めると参加者が増えるという話があった。

SNSなどを見ると避難所で飲み屋をすると怒られることが多いが、実は飲み屋があることで避難者同士の交流ができ、避難している人たちの心のケアになる。避難所にも楽しいことが必要だと防災士の方が言っていたので、楽しいことであれば我々もできるのではないかなとなった。それ以外には鴨川周辺に生えている食べられる草を取ってきて食事会で食べてみることを考えている。色々な草が食べられるらしく、そういう草を子どもたちと一緒に探して食べるというのも面白いと思う。

(鈴木委員)

今までの防災イベントを覆すような、創造的な、多くの人に参加したくなるようなことを考えていることが分かり勉強になった。

(杉原委員)

各事業の参加者数は目標達成をしているものが多い印象を受けた。地域の人を動かすという点では既に掘り起こしができていると感じた。イベントの参加者からできたコミュニティや個人を、日々の貸館に繋げていくということができたら貸館の課題が解決されるのではと感じた。工夫を今後していくのか、展望は。

(左京西部いきセン)

今でもイベント参加者などが、こういう場所があると知らなかったということで利用者になってもらうことはある。今あるサークルに勧誘をすることはあるが、サークルを立ち上げるところまでサポートができると本当はいいだろうと思う。

(杉原委員)

サポートもしていますということをプラスアルファで伝えられれば、場所貸しやイベント企画だけをしているだけではないと周知できると、住民からの立ち位置も見え方も変わってくると思う。子育て世帯は潜在的に活動意欲を持っている方も多く感じている。やりたいんだったら、こういったサポートできますよという発信、SNSなどソフト面での発信もしていくと、そこに引っかかってくる人たちが新たなパワーになって地域が元気になっていくのではと思う。

(左京西部いきセン)

こうしたことから生まれた団体の紹介などがあると、自分たちでもできるかもという意識につながると思ったので、やってみたい。

<中京いきいき市民活動総合センター>

(東郷委員長)

ここ2・3年で生まれ変わったかのように多様な活動が生まれ、大学生が子供に体験学習の機会を提供するなど、貸館利用が高まるような工夫がなされている。他方で、多世代交流ということで元々住んでおられる団地住民を対象とした活動は行われているのか

(中京いきセン)

多世代交流の事業では高齢者を対象にしているものもあり、近隣の高齢者の方も来ている。スタッフもなるべく高齢者の方にも声掛けをしており、いきセン近隣の高齢者施設の職員の方にも事業の案内をし、高齢者に来ていただけるようにしている。

(東郷委員長)

社協とも連携し、悩みや課題のある方を繋いだりしているということか。

(中京いきセン)

そうである。

(鈴木委員)

多世代交流事業も参加者が増えていて、一つの世代だけではなく、必ず保護者と幼児、高齢者や留学生など異なる種類の方をうまく掛け合わせて相乗効果を引き出すようなイベントを上手に手掛けている。広報物も分かりやすく、成果が見やすいものを定期的に作成されている。SDGs についても年々変化があり、参画団体が増えてすばらしいと思った。特に若い世代の方とうまく連携されていると思うが、その秘訣は。

LINEを更新するタイミングに気を付けているという話もあったが、若い方と連絡するにあたって、LINEやインスタに気を付けて運用しているのか。

(中京いきセン)

LINEは、新しく来られた方にも登録を促している。いきセンからの情報配信やイベントへの申込みも簡単にできるのでということで案内をしている。横のつながりで知っていただくことで登録者数も増えてきていると思っている。

(鈴木委員)

立ち上げてそんなに時間がたっていないが、かなり周知をされている。QRコードの掲示も効果があると思う。他センターの参考になると思う。

(中京いきセン)

広報が得意な職員がいる。年齢によって考え方が様々なので、いろんな人に聞いてみて、考えている。高齢者にはSNSで配信しても届かないが大学生には届くし興味を持たば声をかけてくれる。この点はうまく分散して使っているところ。

(鈴木委員)

年齢別の効果的な広報手段のノウハウが蓄積されている。他のセンターの参考になると思う。今後とも期待している。

(森本委員)

中京ならではのと思うのが、協力団体に去年はソフトバンクがおられたが、今年はソフトバンクに加え、企業がさらに増えているということである。

色んな団体と協力している例は他のいきセンにもあるが、多くは大学、他のNPO、市民活動団体だ。会社がNPOと並んで一緒にやっているのがいいなと思っている。

ソフトバンクはエコ〜ると京大経由で知り合われたと思うが、協力したいという企業はどのように増やしていったのか。

(中京いきセン)

つながった団体から紹介があったり、全て会話を通じて繋がっていった。

(森本委員)

間接的に繋がった企業とも一緒に事業をやるというところまで到達されたのですね。企業はどのような形で参加されているのか。専門的なことをレクチャーするとかか。

(中京いきセン)

ノウハウ的なことで情報をもらえたりという感じ。

(森本委員)

専門としてやっているところがメンバーとして協力している関係性作りが良いと思っているので、もっと増えていくことを期待している。

(城戸副委員長)

ネットワークを広げていって、QRコードでも、LINEでも利用者目線で使いやすくという取組をされているのが良いと思った。他方でそれが貸館の利用件数に繋がっていないという現状は、どのように捉えられているのか。

(中京いきセン)

今まで使っていた方では料金が上がって、時間をセーブされていたのが、少し利用が戻ってきている現状があり、新規の利用者も増えている。ただ、建物の構造として3階が使いにくい。1階の会議室が人気で、2階は他の施設が入っており使えない。3階にはエレベーターがないので身体が不自由の方が使いにくい構造となっている。

実際に身体の不自由な方や高齢者で近隣の方からは、借りるよりもサロンの事業に参加すれば、1階でできるという話もある。

(城戸副委員長)

エレベーターを付けるというのは難しいか。

(京都市)

いろいろと厳しい。

(中京いきセン)

上がってしまうと降りるのも大変という方もいる。赤ちゃん連れも上の階では参加しにくいという状況がある。

<東山いきいき市民活動総合センター>

(東郷委員長)

オーディオビジュアル機器をいかしながら多様な事業活動を手堅く行っているという印象を受けた。他方で高齢の方々が持っているリソースをいかしながら、参加だけではなく、語り部など、子どもの世代に伝えるとか、彼・彼女らが参加できるような活動があれば、もっと多世代交流が進むと思うが。

(東山いきセン)

その部分で行くと、「みんなの学校ごっこ」が役立っている。先生は60～70名のうちかなりの高齢者がいる。その中には自身の戦争体験を伝えるなどで、先生をやりたい高齢者の方が多い。1箇月に一回くらい、次はまだかと尋ねてきて、次の「学校ごっこ」を待ち望んでいる方もおられる。それとは別で、ふらっと訪ねてこられて、こういうことがしたいという相談を受けることがある。今相談を受けているものとしては、元々美容師をしていた高齢の女性から、久しぶりに髪を切りたいという相談があり、センターのロビーでチャリティーカットをしたらどうかと提案した。切ってもらった人に募金をしてもらって、経費を差し引いて全額募金するという事を考えている。このように「みんなの学校ごっこ」であったり、相談というところの中から高齢者の方々の知識や経験を世の中にいかしていくという取組を細々とやっている。

(東郷委員長)

そうした企画もタイトルをつけるなどして、分かるように報告書に入れるなどすれば、より効果的だと思う。

(鈴木委員)

「みんなの学校ごっこ」など、フォーマットを他地域にも展開できるぐらいのノウハウが積み重なりどんどんブラッシュアップされている。一方で、eスポーツなど新しい事業にも果敢に取り組みされており、継続しながらも新しい事業をどんどん柔軟に取り入れているのが東山の強みだと感じている。

運営に関してもweb予約やPOSレジを導入するなど新しいことをされていて、他センターの参考になると思う。その中で、POSレジを導入して、業務効率化されたということがあったとのことだったが、posレジといえば、データが集積されていくイメージがあり、そうしたデータの利活用・分析は考えているか。

(東山いきセン)

そこは着手できていないところ。日々の受付業務が改善されており、部屋の利用状況などのデータは出せるが、それらを活用するところまで行っていない。どこかのタイミングで分析をかけたいと思っている。

(鈴木委員)

貸館の利用に伸び悩んでいるセンターもあり、導入を考えているセンターにも参考になると思う。実際に利用されている方のデータも今後の利用促進の参考になるのではと思う。

次に、継続して取り組んでいるメディアセンター事業で動画スクールをされているが、動画スクールを修了された方が、センターの意図するその後の活動に繋がっていかないという課題があるといったが、受講修了生は動画制作の技術だけを吸収する目的で、市民活動やソー

シャルグッドな動画を取るという取組をモチベーションとしてきていないという状況があるということか。

(東山いきセン)

まさに指摘のとおりで、参加者の動機が動画を作れるようになりたいというところ。動画スクールの内容として、卒業制作を行うことになっており、必ずソーシャルグッドなものに限定している。そこに一度触れてもらうということだけでも一つハードルがクリアできているのではと思っている。そこから一歩踏み出してチームの活動参加に繋がらないというところがある。この点については、うまく勧誘できていないなどセンタースタッフの力量の問題もあると考えている。スタッフが事業の繋がりを意識できておらず、事業をこなすというようになってしまっており、連続性を持ってもらえるようにスタッフ研修を改善する余地があると思う。

(鈴木委員)

ソーシャルグッドなものを発信することで社会や市民に喜ばれている生きた事例が腑に落ちる形でスキルの習得中に実感できるような機会があれば、受講者がそこに貢献できるかもしれないという接点が、その後に生きていくのではと思う。

(東山いきセン)

全3回の講座の内容が動画のスキルを伝えるというところに寄りすぎていたということがあると思う。

(鈴木委員)

スキルを伝えるだけではなくて、そのスキルがどのように社会で生きて、なおかつ、それが喜ばれる、自分が役に立てるというやりがいがあれば、せっかく学んだスキルをそういう形で活かしたくなるのではないかと思った

<下京いきいき市民活動総合センター>

(東郷委員長)

伝統産業の活性化に向けた事業と市民参加をつなげる工夫を行っている点が非常に大きな特徴になっていると思う。こうした工夫が貸館収入につながっているのではないか。他のセンターに比べると予算に対する実収入が多いが、どのような工夫がなされているのか。あるいは、競合が少ないのか。

(下京いきセン)

特段お金をかけて広報をしているということもない。コロナ前の利用状況に戻ってきている。傾向としては、コロナで1回離れた方が、他のセンターを探したが、下京いきセンが安いということで戻ってきたり、現在使っている団体の方が他の団体にも所属しており、その団体でもセンターを使ってくれるなど、ファンを獲得していくということが大切かと思う。

(東郷委員長)

芸大の移転も大きいのか。

(下京いきセン)

芸大ができたことで地域の雰囲気は変わったかなと思う。ただ、芸大生は青少年活動センターを利用するので、芸大生のいきセン利用はない。直接的に芸大関係の利用が増えているということではないが、芸大生がいきセンの事業の方に参加されることが多い。

(鈴木委員)

細やかに地域が持つリソースや文化を色々なところと掛け合わせて新しい事業を生み出されているということを丁寧にやられているという印象。煮凝り作りなどは面白いと感じた。地味であるがストーリーが明確であるからこそ、東京からこの事業（煮凝り作り）を当てて来る方がいたということを知ると、オーバーツーリズムの解消や交流人口の創生など近年課題とされていることの解決の糸口につながるような独自性、可能性のある事業だと思った。

ところで、昨年の報告で聞いたと思うが、貸館で貸しているところではなく、ロビーなどを使って、作品を展示したいニーズがあるということで検討していくという話があったと思うが、その点はどうなっているのか。

(下京いきセン)

取組に関しては、京都市も前向きに対応していただき、実施手前まではいったが、立地がよいところなので、どのような仕組みにしたらいいのか、今探っているところ。

(京都市)

利用しやすいようにと思うと、貸出のルールなどの詳細を考える必要がある。

(鈴木委員)

立地が良いし、芸大もあって、活動を部屋の中やアトリースでやる以外に、展示という見せ方で利用したいニーズがあり、ギャラリーではなく、センターでやるからこそ他の団体との別の事業の創生につながるという効果が見込めるのではと思う。また、収入増も見込めるのであれば面白い取組になるのではと期待して待ちたい。

(下京いきセン)

指摘のとおりセンターで展示することで、普段は芸術作品を見に行くことがない人の見る機会にもなる。また、地域の方に見てほしいという展示をセンターのロビーを使えると効果があるなど実感しているのでスピードをあげて検討したい。

(以上)